

大博物館



津山郷土博物館

だより



鶴山館（旧修道館） 津山市山下 津山城跡内

津山藩の藩校とされる学問所（文武稽古場ともいう）は明和2年（1765）の創設であるが、いわゆる「藩校」にふさわしく整備されたのは、施設・制度ともに幕末期であった。

維新直後の明治元年（1868）12月、藩は「文武之道研究」を急務の最優先課題として、文武稽古場の修復を目指す。また、藩の職制改革に伴って修道館と改名された。修復とは言え、実際は従来の敷地の東（現・NTT津山支社一帯）への移転・新築で、翌2年正月に土木工事が始まったようである。この新築に伴い、数学・洋学を教科に採用すべく、人材育成や書物調達も進められた。建物の着工は明治

3年、計画では漢・洋・数学及び習字の各教場や生徒の寄宿舎を備えた本格的な学校として庶民にも門戸を開く予定であったが、工事中に廃藩置県を迎え、明治4年末に漢学教場のみ竣工（鶴山書院と命名）、翌5年正月の落成式挙行中に北条県庁から廃校を通過され、新校「修道館」は幻と消えた。

その後、旧藩校の地では北条県中学・鶴山小学校・津山尋常中学校・津山高等女学校などが開校・廃止または移転を繰り返す。明治36年（1903）旧藩以来の歴史を持つ鶴山書院も撤去が決まるが、津山城跡に移築して永久保存が図られた。以後、「鶴山館」の名称で津山市民に親しまれている。

1

明治28年(1895)9月20日岡山県津山尋常中学校が開校した。校長には菊池謙二郎、教師に赤星政暉(英語)、川村良二郎(数学)、大谷藤治郎(地理・歴史・国文)、菅沼定光(漢学)、柴山節夫(画学)、平井真澄(習字)、江見敬吉(体操)の6名、書記に馬場訊という陣容であった。生徒数は約120人、校舎は山下の旧津山藩校(現NTT津山支店の地)を使用した(『津山青年協和会雑誌』10号)。

ところで、津山における中学校の設立には長い試行錯誤があった。まず、明治5年9月北条県は旧津山藩校に成器中学校を設立したが、1年程で廃校となった。明治9年の北条県の岡山県への合併ののち、明治11年2月旧北条県庁跡(現津山文化センターの地)に県立の津山変則中学(のち津山中学校と改称)が設立されたが、やはり持続することなく明治13年6月閉校となった。次に、翌14年8月六郡共立中学が設置された。これは西々条以下の6郡が合同で同地に設置した公立の中学校であるが、折しも自由民権運動の高揚期であったので、民力休養を叫ぶ民権派の攻撃的となり15年12月またもや廃校となってしまった。明治19年4月の中学校令により中学校は一県一校と定められたので、一時津山における中学校実現は事実上不可能となったが、明治24年12月の改正によりこの原則は緩和された。その翌明治25年10月私立の津山普通学校が開校した。校舎は旧藩校、校長に大村斐夫、教頭菅沼定光、教師に川村良二郎、大谷藤治郎、野矢恭二郎を配し生徒数は約70人であった。運営費は生徒の授業料と津山・津山東の2町及び西苫田以下5村の補助金をもってした。翌明治27年3月津山周辺の4郡町村は県立中学校設立を岡山県会に請願、同年12月高粱中学校とともに設立が議決された。かくして美作住民の長年の悲願のもとようやく津山尋常中学校が開校するに至った。そしてその教師6名のうち3名、生徒の大半も普通学校からの転入者であったことから窺えるように、津山尋常中学校の基礎は津山普通学校にあったのである。

2

津山尋常中学校創立時の教員のうちここで問題にしたいのは大谷藤治郎(号は是空)である。是空は慶応3

年(1867)美作国西北条郡山北村(現津山市山北)に生まれ、明治16年上京、18年東京大学予備門(19年第一高等中学校と改称)に入学するが、22年脳痛のため休学(翌年に退学)、大阪で療養生活を送ることとなった。その大阪療養時代の日記が『浪花雑記』(和田克司編著『大谷是空『浪花雑記』—正岡子規との友情の結晶—』和泉書院)である。その中に「告郷里青年諸子」(第2編34)、「将に遊学せんとする少年に向つての話」(第2編52)などの教育論が展開されており、是空の教育に対する並々ならぬ識見と情熱が窺える。その特徴は「終生学問の妙味を覚り学者とならんと欲する人は進むで東京へ行くも可也。されども或は戸主にして先祖代々の定職あるものも可成夫れを次で実業家とならざるべからず。此等の人は強ち東京へ出づるに及ばず、地方良教師に付て其関係ある学問を修むべし。尋常中学校にても亦かなりの事は学び得らるべきなり」(172頁)などであるように、安易な東京遊学を戒め地方教育の充実を図ることである。明治24年5月27日の「津山青年協和会津山支部へ呈出する建議案」(第3編77)もかかる是空の持論を展開したものである。これは青年協和会による東京寄宿舍設置のための寄付金募集計画に対して、むしろ津山における私立中学校の設立の必要を説いたものである。「小生は地方分賢を主張するものなり。地方経済を主張するものなり。故に私立の学校設立の説も愈小生が胸中の大部分を占めるに到り候次第に御座候。(中略)小生は此頃坂地に於て筆硯の業に従事罷在候得共、賛成を得て其協議も有之候節は直に帰津敢て奔走の勞は厭ひ不申候」(313頁)とあり、津山での中学校設立がかねての持論であり、そのためには津山へ帰って奔走することも厭わないとまで述べている。是空晩年の回想に「津山普通学校の設立を主張し、やがてそれを引き受けて経営の任に当り意外に盛んになったので、それが基礎となって現在の県立津山中学校が出来た」(『津山青年協和会誌』52号)とあるので、先の建議は津山普通学校のことであり、言に違わずその設立に奔走したことが窺える。かくして明治25年7月頃大阪での療養生活を引き払って津山に帰郷した是空は、同年10月1日の津山普通学校の開校とともに教員に就任したのである。中学校教員としての是空はかねての持論を実践

したことであろう。そしてそれが発展した津山尋常中学校の設立に向けても何らかの行動を行ったことは想像に難くない。

3

そこで注意されるのが津山中学校初代校長の菊池謙二郎(号は仙湖)の存在である。仙湖は慶応3年水戸支藩石岡藩家老菊池慎七郎の二男に生まれた。明治15年茨城中学校に入学したが、中退して上京、共立学校を経て17年東京大学予備門に入学する。23年帝国大学法科大学に入学したが、文科大学に転科、26年に卒業する。翌年山口高等中学校教授となるが、明治28年8月新設の津山中学校長に迎えられて津山に赴任してきた(『津山高校百年史』上巻による)。この仙湖の校長就任の事情については詳細は不明であるが、筆者はその招聘に是空が大きく関与したと推測するのである。以下その理由を述べよう。

第一に、仙湖と是空は東京大学予備門以来の友人であったことである。すなわち明治22年の『筆まかせ』で正岡子規から「厳友」と呼ばれているように、仙湖は共立学校以来の子規の親友である。また同じく「親友」と呼ばれる是空も子規の文字どおりの親友である(『子規全集』第10巻、講談社版、114頁)。是空の回想にも「子規と相往來する間に、いづれが紹介するといふことなく同級生の中で別懇になったのは、菊池謙二郎(仙湖)、米山(名失念)、夏目金之助(漱石)、細井岩弥、山川信二郎等で云々」(『大谷是空「浪花雑記」』405頁)とあるように、仙湖と是空は子規を介しての友人であった。このような旧知の二人が偶然津山で再開したと考えることも全く不可能ではないが、やはりそこに何らかの作為が働いていたとみるのが自然ではなかろうか。

第二の根拠は両者の津山中学在任中の一事件である。校長に就任した仙湖は中学校充実策の一環として、明治29年6月東京から田岡嶺雲を招聘したが、その嶺雲が雑誌『日本人』に中学校批判の一文を寄せた。これが仙湖の逆鱗にふれ、ある日曜日「今日田岡君の此文を公にした真意を聞て自分か田岡君か何れか処決せざるべからず」と、嶺雲本人と教頭奥太郎、是空の3人を学校に呼び寄せた(『大谷是空「浪花雑記」』426・427頁)。幸いこのときは是空の巧みなりとなして大事に至らなかったが、問題はこの場の顔触れである。教頭の奥太郎は当然としても、なぜ一教員にすぎない是空がこの場に呼ばれているのであろうか。是空によれば、仙湖は「奥

君は教員の代表者として、大谷君は田岡君の親友として立会を乞ふ所以なり」(同書427頁)と説明したという。確かに嶺雲と是空は津山で親しく交際したが、その交わりはなお日が浅く、しかも弁護人を必要とするほど嶺雲が柔な人間とは思われない。これはおそらく仙湖の言葉にもあるように、事よっての自らの辞職にそなえて、仙湖招聘に関係した是空の立会を求めたと解釈すべきではなかろうか。

4

仙湖招聘に是空が関与したと推測する第三の理由は、是空の津山中学校辞職の事情である。仙湖は明治30年4月千葉県尋常中学校長に転出した。これは校長就任以来進めてきた津山中学の基礎づくりがこのときほぼ整ったことによる通常の人事異動とみてよいだろう。ところが、同年4月(『大谷是空「浪花雑記」』427頁)ないし5月(『津山高校百年史』上巻)是空もまた津山中学を去っているのである。同年6月21日付け是空宛て子規書簡に「賢兄此頃御壯健の赴奉賀候」(『子規全集』第19巻、172頁)とあるので、その辞職が健康上の理由でないことは明白である。これはやはり仙湖と進退をとみにしたとみるべきだろう。自身が招聘に関与した仙湖の転出という事態をむかえて、自らの津山中学における役割も終わったと判断して、新たな進路を模索しはじめたのではなかろうか。その後の足跡からみて、その進路とはおそらく実業界への転身と推測される。このような筆者の推測と抵触するのが、明治28年8月10日と推定される久原躬弦の菅沼定光宛書簡である(『津山高校百年史』上巻、68・69頁)。久原躬弦は旧津山藩士にして第一高等中学校時代の仙湖の師である。この中で久原は菅沼に仙湖を紹介し「本人ハ津山にハ知人を有せざる趣にて全く孤独の有様に御座候」としているが、仙湖と是空の関係は前述のとおりであり明らかに事実反する。おそらく仙湖の津山赴任を前にしての久原訪問は津山出身の旧師への儀礼的訪問と思われる。

以上、3点にわたって仙湖招聘における是空の関与を述べてきた。いずれも状況証拠にとどまることは否めない。しかし前述のような意義をになった津山普通学校から津山尋常中学校へ転任し、独自の教育論を有し、かつ後年実業家、評論家として活躍した是空が津山中学校創設にあたって一定の役割をはたしたと推定することもあながち的外れではないと思うのである。

(湊 哲夫)

平成12年度 博物館行事予定

行事名 日程	展 覧 会	町奉行日記を読むⅢ 古文書講座	津山城受取り 近世史講座	夏休み子供歴史教室 弥生土器をつくる	美作の文化財めぐり (友の会)
平成12 3	企画展 津山藩の教育 3/11 4/16				
4					
5		●5/12	●5/25		●5/14
6		●6/9	●6/22		
7		●7/14	●7/27	●7/25 ●7/26	
8				●8/17	
9		●9/8	●9/28		●9/17
10	特別展 国分寺一天平時代の国家と仏教一 10/14 11/12	●10/13	●10/26		
11		●11/10	●11/23		●11/12
12					
平成13 1		●1/12	●1/25		
2		●2/9	●2/22		
3	企画展 津山城調査速報展 3/17 4/22	●3/9	●3/22		
4					

博物館入館案内

- 開館時間：午前9：00～午後5：00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：小・中学生 100円 (80円)
高校・大学生 150円 (120円)
一般 210円 (160円)
※ () は30人以上の団体

大 博物館だより No.26 平成12年4月1日発行

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ㊟(0868)23-9874

印刷：(株)廣陽本社

大 は津山松平藩の検印で剣大といひ、現在津山市の市章となっている。